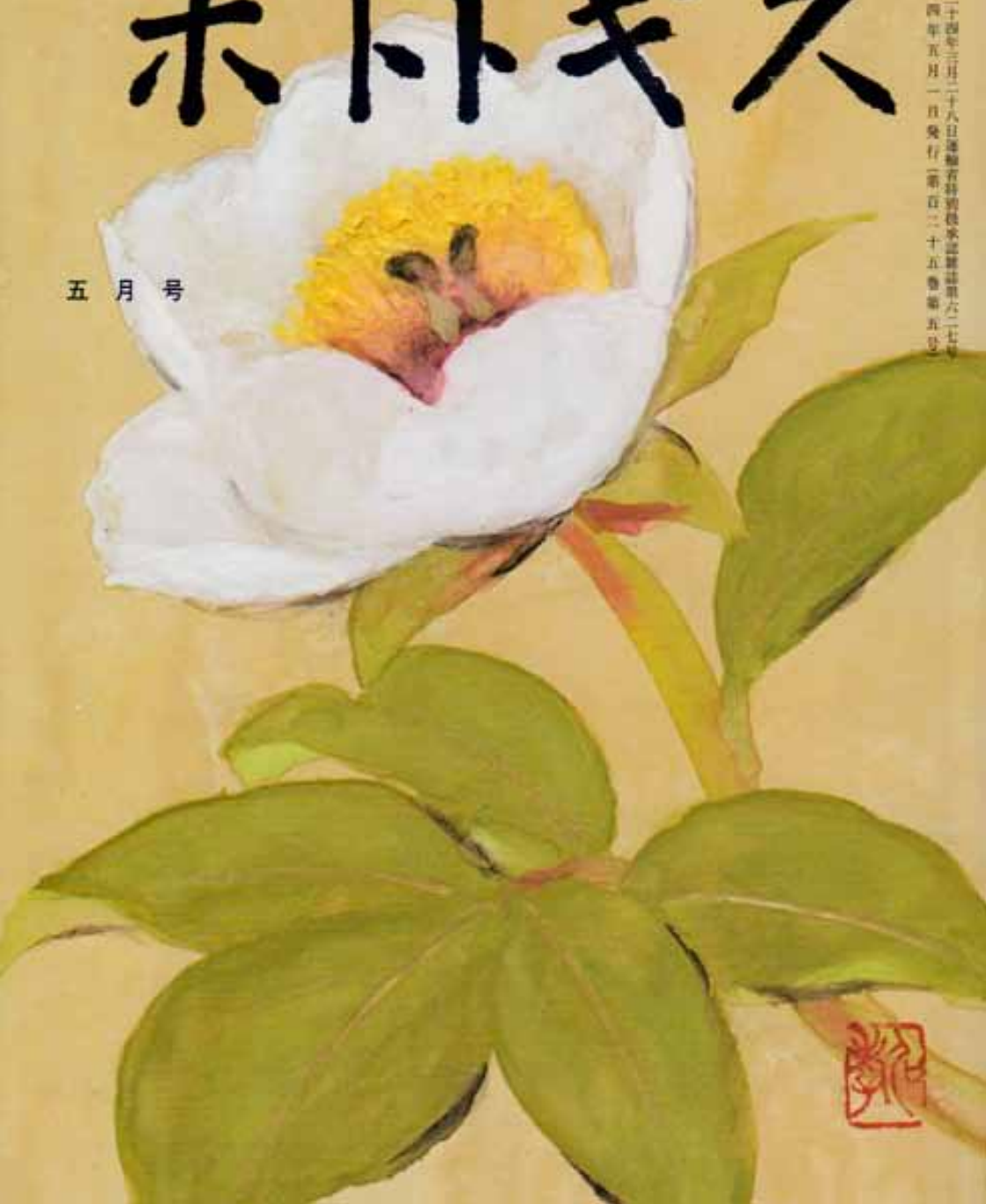


ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特約機軸誌第百六十七号
今期四年五月一日発行 第四百二十五巻第五号

ホトトギス

五月号





稲畑汀子先生御逝去

令和四年二月二十七日

ありし日の汀子先生

撮影：藤田浩司

風雅の小筥〔五十二〕

廣太郎

ホトトギス社の事務所の変遷は続くが、丸ビル七五三区に事務所を構えてから、ホトトギスは昭和五十五年一千号を迎える事となったが、それを誰よりも楽しみにしていた高濱年尾は、昭和五十四年十月二十六日に逝去するのである。急遽主宰を継いだ稲畑汀子がこの一千号のイベントを司る事となる。ここから汀子主宰の時代を迎えるのである。

ここからは私事になるが、この丸ビル七五三区にホトトギス社が居を構えている時に私は大学を二年留年して卒業し上京して同社に就職するのである。御存知の通り私はそれまでは関西で生れ育ち、東京の事情には疎くて、実は以前山会の写生文としてホトトギスに執筆した事も記憶しているが、丸ビルといえば大阪駅前「マルビル」を想像しており、円筒形のビルをこの東京の丸ビルに重ね合せていたのである。昭和五十七年四月一日に初めて東京駅の丸の内南口改札を出ると、目の前であると聞いていたビルのどれ一つとして円筒形のビルは見当らない。丸ビルが「丸の内ビルディング」の略した通称である事を知るのは後の事である。

当時の丸ビルをはじめ、周囲のビルは完全にオフィスビルとして、三菱グループの本社が多く、丸ビルも三菱地所株式会社の本社が上階に入っていて、その下がテナントビルとして、ホトトギス社を含めた大小の会社が居を構えていたのである。ビルの中にはレストラン等の店舗があり、食事は勿論、その他書店、文房具店等の生活用品の店もあり、ビル内がまるでひとつの町のようになっていたのを思い出す。

廣太郎句帳 廣太郎

令和三年五月一日 芦屋ホトトギス会

乱心の君に牡丹崩れゆく

更衣孫の成長諾ひて

降り立てば人出大阪薄暑

五月二日 野分会芦屋例会ハイブリッド句会

封切りて故郷香る新茶かな

翻る山女山気を放ちつつ

山女釣る己が気配を消す漢

新茶汲む歌を忘れし母の黙

タイガース調子ええわと新茶汲む

五月二日 青風会芦屋例会

舟芝居筑紫の空を淋しめず

とびを飛ばす一番星に招かれて

飛魚の眼宇宙を恋うてをり

五月六日 蕉心会通信句会

卯浪寄す人工島を持ち上げて

牡丹の一片風の使者となる

葉桜を競ひ大川芦屋川

夏霞富嶽を覆ひゆく仔細

電車又遅れ薄暑の出社かな

子供の日に子供に還る君の居て

菖蒲湯の香を撒き散らし孫走る
袋角古都の賑はひ失せし日々

五月七日 カトリック新聞選者吟

木の芽風心白紙にしてをりぬ

五月十日 朝日カルチャー若草句会

羽衣の如一片の牡丹散る

下校の子声まで衣更へにけり

柏餅葉裏に香り滲ませて

更衣新車の香り纏ひつつ

寺門入るより牡丹の崩れ初む

五月十三日 土筆会投句

豆飯に目覚めの早き厨かな

学生街抜ければ職場新樹晴

軽暖を纏ひて孫の走り来る

犬の鼻薄暑に濡れてをりにけり

豆飯を炊けば帰宅の早き夫

五月十四日 北國文芸選者吟

更衣三十五年着古して

五月二十日 登高会

都草都心の色に紛れざる

豆飯やザルツブルクの塩加減

都草黄を競はざる気品かな

ビル街に神田祭の吸ひ込まれ

一匙の酒に豆飯味を秘め
五月二十一日 廣邦会

天帝の機嫌卯の花腐しかな

黒々と車窓の富嶽更衣

五月二十三日 青風会東京例会選者吟

更衣心の枷を解き放ち

みよし野の思ひ出畳み更衣

衣更へて殉教の心はも

更衣久々の句座華やげり

通勤の歩幅広がり更衣

五月二十三日 野分会東京例会

山気濃く塗り替へてある山女釣

結納の品新茶の香纏ひつつ

斑点の歪み山女の釣り上る

五月二十五日 若水句会選者吟

卯浪寄す底に英霊眠らせて

豆飯や子供に還る母のゐて

丹波路の気品泰山木の花

五月二十六日 目黒学園句会

江戸前の気品に穴子釣り上る

軽暖の袖を妖精撫でゆけり

穀象の一匹に米戦けり

聖櫃のランプ薄暑を撥ね返す

雑詠 廣太郎 選

兄いつも瓢々として爽やかに 加須岡安紀元
 酒好きの兄に温泉宿の濁酒 同
 極月や兄を捜せば居酒屋に 同
 年礼もそこそこに師の枕辺へ 大阪酒井湧水
 話せずも目と目は合せつ寒見舞 同
 幽かなる師の微笑みに初笑 同
 メガホンの教師小春の芯に立つ 渋川木暮陶句郎
 短日の袋小路を引き返す 同
 小説の中のをんなを追ふ炬燵 同
 越は雪富士は快晴ほしいまま 長岡安原葉
 早春の街高階に望む富士 同
 洛北の余寒の寺や人見え 同
 田の神の旅にも野良着脛出して 相模原木村享史
 新米を磨ぐ一と粒も流さずに 同
 虚子よりも三つ生き過ぎゐる秋思 同
 頑な心を芯に著ぶくれて 袋井湖東紀子
 軒につくまで積み上げて櫓の宿 同
 火の玉となりて冬日の沈みゆく 同

絨毬に色褪せることなき月日 神戸山田佳乃
 ふくよかな志功の菩薩雪の宿 同
 細々と空を分け合ふ冬木の芽 同
 滝凍ててしろがね色の竜となる 同
 一瞬といふ永遠に滝凍つる 藤井啓子
 一椀に海匂ひ立つ雑煮かな 同
 双六の折り目に賽のつまづきて 京都山崎貴子
 家長たる父にもありし春著かな 同
 餅花や元祖本家と軒連ね 同
 熱燗の冷め御開きとまだならず 香川湯川雅
 人生を捲る思ひに年惜む 同
 待つことに慣れ底冷に杭となる 同
 今はまでわが詩悴むことなかれ 熊本岩岡中正
 湯豆腐にいくさなき世をことほげり 同
 ゆく年を乗せて急がぬ路線バス 同
 冬帝へ飛翔の構へ天守閣 奈良古賀しづれ
 城見舟とて煤逃の二三人 同
 冬麗や空となり切るガラスビル 同
 いにしへの恋弾きとぶ歌留多会 神戸涌羅由美
 歌かるた十二単の色褪せず 同
 じりじりと膝にじり寄る歌留多とり 同
 道ならぬ道も道なり近松忌 同
 佗助や夫婦茶碗の置きどころ 和田華凜
 白朮火を回し代代京をとこ 同

雑詠句評 (四月号より)

一葉またロミオに落ちて野外劇 静岡 須藤常央

「一葉」は「桐一葉」の傍題であり、桐の葉が落ちる頃になると秋の気配を感じ、地面に落ちるとききの音などにはどことなく寂しさを感ずることもある。

シェークスピアの悲劇「ロミオとジュリエット」が野外ステージで演じられていたのだろうか。許されぬ恋の物語であって、時折落ちて来てはロミオに触れる桐の葉になお一層の哀れみを感じたことであろう。この一葉がジュリエットに触れていたとしたら、この句の作者はどう感じていたことであろうか。(紀元)

気候の良い秋の野外劇である。ロミオとジュリエットが上演されていた。クライマックスの場面かどうかは判らないが、近くにあった桐の木から一葉が丁度ロミオ役の俳優に当たったのだろうか。何かこの物語ともマッチしているようだ。(廣太郎)

秋晴に割込んで来る軍用機 大宰府 持永真理子

秋晴の一日、のんびりと雲の浮かぶ空を見上げていると、突然あらわれたのが軍用機。おそらく日本に駐留する某国の、訓練用のジェット戦闘機であろう。この場に一番ふさわしくない、無粋な物体の出現に、ほんの一瞬ではあるが、おだやかな気分を害された感じの、作者の心情の伝わってくる一句。(公次)

旅客機はしょっちゅう空を飛んでいるところを見るが、軍用機となると自衛隊やアメリカ軍の基地の近くでないとなかなか見る事は出来ないだろう。筆者の経験では軍用機は音が大きい。秋晴との不思議な対比を感じる。(廣太郎)

青写真リリアン編んで待つ子かな 神戸 和田華凜

青写真もリリアンも昭和に流行った子供の遊びの一つ。決して活動的とは言えない遊びだが活発な子供たちまで当時よく親しん

だ遊びである。

青写真から浮かび上がってくる色合いも、リリアンから生まれてくる美しい紐の色彩も、今となつては郷愁のような物を感じさせられる。

青写真の出来上がりを待つ子供の密やかな心の弾みや期待感がリリアンに編み込まれて生まれて来る紐の色となつて紡ぎ出されているような一句である。(しげ人)

リリアンは女の子、青写真は男の子、と限定してはいけないのかも知れないが、一時代前の子供の遊びで、筆者は両方やった事がある。特に青写真は日光写真とも言ひ、待っている間わくわくしたものだ。そんな様子が明るく描かれている。(廣太郎)